

通学キャンパス立地環境の違いが 大学生の浮気に対する態度に与える影響の検討

Effects of differences in campus locations on the attitudes of
university students toward unfaithful love

杉 山 匡*
Tadashi SUGIYAMA

要旨：本研究は、大学生が学生生活を過ごすキャンパスの立地環境の違いが、彼らの浮気に対する態度にどのように影響しているのかについて検討することを目的とした。浮気に対する態度尺度を作成し、文教大学越谷キャンパスに通学する学生と東京都心にキャンパスを構える大学に通学する学生を対象とした調査を実施した。その結果、両大学の学生は、いずれも浮気に対してやや否定的な態度であることが示された。しかし、文教大学よりも東京都心の大学の学生の方が浮気に対する否定的態度が弱く、東京都心の大学の男子学生においてその傾向が顕著であることが示された。キャンパス立地環境が娯楽の多様性や生活スタイルなどの違いを生じさせ、それが浮気に対する態度に影響を及ぼしている可能性が示唆された。多様な価値観と接触する機会が郊外と比べて相対的に多い都市部の環境への適応を通じて、都市部のキャンパスに通学する学生は、様々な価値観に対する社会的寛容性を獲得しているものと推測された。

キーワード：浮気、態度、恋愛、都市部、郊外

序 論

大学生の本分は学業であるが、アルバイトやサークル活動、その他の様々な活動を通じて、卒業後に自立した適応的な社会生活を営むための準備をしていると考えられる。独立行政法人日本学生支援機構（2014）が公表した「平成24年度学生生活調査」の結果によると、大学生の一週間の平均生活時間で最も長いのが“大学の授業”とその予習・復習に費やす時間であった。これに次いで“娯楽・交友”に費やす時間が長く、平成22年度の調査時と比べて4.75時間増加した。大学生が経験する娯楽や交友の内容は、大学教育とともに彼らの人間形成に大きく影響すると考えられる。

* すぎやまただし 客員研究員・公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンター附属ストレス科学研究所

大学生の娯楽や交友の内容を左右すると考えられるのが、キャンパス周辺の環境である。大前（2005）は、地方国立大学と都市部の大学の文化習得様式を比較し、前者では学内のクラブ・サークル活動が中心となるのに対し、後者では学内外の多様なつながりの中で活動が行われることを示した。また、曾・長澤（1998）では、都市型キャンパスの学生は郊外型キャンパスの学生よりも活動内容が多様であることが示されている。都市部と郊外では、キャンパス周辺の娯楽施設やアルバイト環境などの充実度や、交通手段の発達などに差があると考えられ、これらの違いが大学生の交友関係の多様性に影響を及ぼすものと考えられる。郊外の大学では、豊かな自然環境の中に広大なキャンパスを構えることで充実した設備を整えることができ、学業のための環境としては都心部よりも充実していると考えられる。しかし、上記の通り娯楽や交友のための環境の充実も大学生にとっては重要であり、近年では、志願者数の増加（船橋，2014）を主な目的としてキャンパスを都心部へ移転させる大学も少なくない。大学の都心回帰によって、多様な交友関係を築きながら価値観やアイデンティティを形成していく大学生が増加すると考えられる。

大学生にとっての交友関係の中で重要であると推察されるのが、異性との交際である。交友関係の多様性の違いは、交際相手や交際方法の選択など、異性との交際に関する価値観の形成に重大な影響を与えることが容易に推測される。恋愛関係の構築や崩壊に関する行動の内、個々の価値観の違いが強く反映されると考えられるのが“浮気”である。浮気に関する研究は多くはなく、恋愛研究においては俗的なものとして避けられてきた（船谷・田中・橋本・高木，2006）と考えられている。浮気を直接的なテーマとする研究はほとんど存在しないが、牧野（2011）は、浮気を恋愛関係における排他性の低い行動と位置づけ、排他性に関する社会心理学的研究が示唆を与えている。交際相手との間で行われる様々なコミュニケーション行動の各々に対し、個人がどの程度の排他性を求めるのかには、異性との交際に関する価値観が強く表れるものと考えられる。したがって、大学生の浮気に対する態度には、大学のキャンパス立地環境の違いによって生じる交友関係の多様性の差が影響を及ぼすものと予測される。

そこで本研究では、東京都心から約 25km 離れた郊外に位置する文教大学越谷キャンパスの学生と東京都心にキャンパスを構える大学の学生を対象とし、両大学のキャンパス立地環境の違いが、学生らの浮気に対する態度にどのように影響しているのかについて検討することを目的とした。

文教大学越谷キャンパスのある埼玉県越谷市は、人口約 32.5 万人、昼夜間人口比率 86.6% のベッドタウンである。現在でこそ鉄道網が整備され、東京都心まで 45 分程度でアクセスできるが、東京大都市圏の南部や西部と比べ、都市化、住宅地化が遅れた（北林，1983）。そのため、現在でも自然環境が多く残り、文教大学越谷キャンパス前を流れる元荒川とその長閑な景観は、学生にとっても「大学の象徴」であり、アイデンティティ形成につながる側面を持つ（斎藤・岡本・佐藤・佐藤・中林・八藤後，2012）と考えられている。

研究 1

目 的

研究 1 では、大学生の浮気に対する態度を測定するための尺度を構成することを目的とした。大学生の“浮気に対する態度や考え方”や“浮気関連行動”を収集し、これらを浮気に対する態度を測定するための意見項目として修正し、各項目の浮気に対する肯定度を等現間隔法の手続き

に従い尺度値として示すことを目的とした。

方 法

「浮気」に対する意見項目の収集 心理学を専攻する大学生 14 名（男性 4 名、女性 10 名、平均年齢 $19.36 \pm .50$ 歳）がランダムに 4～5 名のグループを形成し、各グループ内で、浮気に対する肯定的意見、中立的意見、否定的意見を持つ大学生がそれぞれ示すであろう“浮気に対する態度や考え方”や“浮気関連行動”について議論を行った。各グループから提示された意見を重複を避け収集し、各意見の多義性や言葉づかいについて、浮気に対する態度を測定するための意見項目として相応しい表現に修正した。その結果、67 項目が抽出された。

また、牧野（2011）では、18 個の浮気に対する態度項目が示されている。これらの項目は「浮気への否定的態度」、「浮気への憧れ」、「浮気の積極的容認」、「浮気の消極的容認」の 4 因子に分類され、浮気に対する肯定的態度と否定的態度を表す項目が含まれていると考えられた。そこで、牧野（2011）の 18 項目の内、上記の 67 項目と重複しない 13 項目を加え、計 80 項目を浮気に対する意見項目とした。

「浮気」に対する意見項目の尺度値の決定 大学生の“浮気に対する態度や考え方”や“浮気関連行動”についての議論を行った大学生 14 名に対し、上記の手続きによって収集された 80 個の浮気に対する意見項目が、それぞれどの程度浮気に対して肯定的な意見であるかについて、“極めて肯定的”、“肯定的”、“どちらかといえば肯定的”、“どちらとも言えない”、“どちらかといえば否定的”、“否定的”、“極めて否定的”の 7 段階での評価を求めた。

結 果

「浮気」に対する意見項目の尺度値の分布と多義性 浮気に対する各意見項目への評価は、“極めて肯定的”を 7 点、“どちらとも言えない”を 4 点、“極めて否定的”を 1 点として得点化した。意見項目ごとに、大学生 14 名による評価の平均点を算出し、これを各意見項目がどの程度浮気に対して肯定的であるかを示す尺度値とした。また、意見項目ごとの評点の標準偏差、中央値、四分位偏差を算出した。その結果、最も肯定的と評価された意見項目は“浮気をすることに魅力を感じる（尺度値 = 6.500、 $SD = .855$ 、 $Mdn = 7.000$ 、 $Q = .500$ ）”、最も否定的と評価された意見項目は“何故浮気するのか理解できない（尺度値 = 1.143、 $SD = .363$ 、 $Mdn = 1.000$ 、 $Q = .000$ ）”であった。

これらの 2 項目を含むすべての意見項目の尺度値の分布を確認した結果、中立的意見項目や肯定的意見項目（尺度値 = 3.8～6.5）では、特定の尺度値域に項目が集中することなく、万遍なく分布していることが確認された。一方で、尺度値が 3.1～3.7 の範囲には意見項目が分布せず、中立よりもやや否定的な意見項目が不足していることが確認された。また、否定的意見項目（尺度値 = 3.0 以下）の多くで標準偏差が 1.0 を上回った。

等間隔法による「浮気」に対する態度尺度の構成 浮気に対する 80 個の意見項目から、各項目の尺度値の等間隔性を最優先として、浮気に対する態度尺度を構成する項目を選定した。中立的～肯定的意見項目では、原則として標準偏差が 1.0 未満、四分位偏差が .7 未満である項目を採用し、この基準に基づく採用が困難であった尺度値域からは、基準から大きく外れる多義性を持つ項目でないことを確認して採用を行った。尺度値が 3.0 以下の否定的意見項目では標準偏差が 1.0 を上回る項目が多かったが、四分位偏差が .7 を下回った項目を採用し、項目の多義性を最

小限に留めた。

最終的に浮気に対する態度尺度を構成する項目として 22 項目が選定され、これらの項目の平均尺度値は 4.029 であった (表 1)。

表 1 「浮気」に対する態度尺度採用項目の尺度値と多義性

意見項目	尺度値	尺度値の 間隔	SD	Mdn	Q
浮気することに魅力を感じる	6.500		0.855	7.000	0.500
今の恋人に飽きたから浮気してもよい	6.286	0.214	0.994	7.000	0.500
浮気をすることで、恋人と別れた時の保険をかけることができる	6.071	0.214	0.616	6.000	0.000
恋人が浮気をしたから自分もしてもよい	5.929	0.143	0.917	6.000	0.750
浮気に憧れる	5.857	0.071	0.864	6.000	0.375
恋愛も浮気も本質は同じである	5.500	0.357	0.941	5.500	0.500
性的欲求を満たすためには、浮気は仕方がないと思う	5.357	0.143	1.151	5.500	0.500
浮気を実際しないけどしてみたいという願望がある	5.071	0.286	0.917	5.000	0.750
浮気はだめだと分かっているが、その場の雰囲気をつい浮気してしまう	4.929	0.143	0.616	5.000	0.000
悪いことだけど、浮気をする気持ちも理解できる	4.643	0.286	0.633	5.000	0.500
浮気はだめだと分かっているが、もし言い寄られたら断らないだろう	4.429	0.214	0.514	4.000	0.500
浮気をする人は勇気がある	4.286	0.143	1.139	4.000	0.875
浮気に関して善し悪しが一概には言えない	3.929	0.357	0.616	4.000	0.000
浮気は金がかかると思う	3.786	0.143	1.188	3.500	0.500
浮気をするとは、別れる原因になると思う	3.000	0.786	1.177	3.000	0.375
浮気をすると周りにも迷惑がかかると思う	2.571	0.429	1.089	2.000	0.500
浮気は淫らな行為である	2.357	0.214	1.008	2.000	0.000
浮気は、本命だけでなく、浮気相手も悲しませてしまうと思う	2.071	0.286	0.917	2.000	0.000
浮気はくだらないことだと思う	1.857	0.214	0.949	2.000	0.500
浮気をする人は人間的にだらしがないと思う	1.643	0.214	0.842	1.000	0.500
浮気をする人は、人間として最低である	1.429	0.214	1.089	1.000	0.000
何故浮気するのか理解できない	1.143	0.286	0.363	1.000	0.000

平均尺度値 4.029

考 察

等現間隔法による浮気に対する態度尺度を構成するため、大学生 14 名から浮気に対する意見項目を収集し、同学生らに各項目の浮気に対する肯定度についての評価を求めた。各項目の平均評定値を当該項目の浮気に対する肯定度を示す尺度値とし、尺度値の等間隔性を重視し 22 項目が選定された。22 項目の平均尺度値は中立を示す 4 に近い値であり、選定された項目に浮気を肯定する項目と否定する項目がバランスよく含まれていることが確認された。

尺度値が 4.0 を上回る肯定的意見項目は、ほとんどの項目で標準偏差や四分位偏差が小さく、多義性の小さな項目を選定することができているものと考えられた。一方で、尺度値が 4.0 を下回る否定的意見項目では、肯定的意見項目と比較して標準偏差の値が大きくなったが、四分位偏差が小さいことから、選定された項目の多義性は許容範囲内に留まるものと考えられた。

尺度値が 4 を下回るやや否定的な意見項目では、尺度値の間隔が他の尺度値域と比べて広かっ

た。牧野（2011）では、浮気に対する容認の態度が“積極的”と“消極的”に分類されているのに対して、否定的態度には同様の区別が存在しなかった。牧野（2011）の「浮気への否定的態度」因子に含まれる項目は、本研究では尺度値が2.5を下回り、浮気に対して明確に否定的な意見項目として評価されていた。したがって、牧野（2011）の浮気に対する態度項目も、肯定的態度項目については積極的肯定から中立に近い態度が網羅されているが、否定的態度項目については中立に近い態度を表す項目が含まれていないものと考えられる。本研究で選定された浮気に対する22個の意見項目は、肯否定の程度の点において牧野（2011）の態度項目と同様の構造であり、かつ、平均尺度値がほぼ中立的な値であることから、一定の妥当性を有する態度尺度であると考えられる。

しかしながら、選定された22項目で構成される態度尺度に含まれる下位概念の検討には、本尺度による測定データの分析が必要であり、研究2ではこれを行う。

研究2

目的

研究2では、研究1で作成された大学生の浮気に対する態度を測定するための尺度を用いた調査データを収集し、同尺度の下位概念を明らかにすることを目的とした。また、大学生が学生生活を過ごすキャンパスの立地環境の違いが、彼らの浮気に対する態度にどのように影響しているのかについて検討することを目的とした。

方法

調査対象者 文教大学に在学し同大学の越谷キャンパスに通学する学生80名（男性38名、女性42名、平均年齢 19.66 ± 1.18 歳）および東京都心のA大学に通学する学生82名（男性42名、女性40名、平均年齢 18.78 ± 1.17 歳）の計162名を調査対象とした。

調査内容 調査対象者らの属性情報として、性別、年齢、在学中の大学が文教大学であるか否か、学年、所属学部（文系、理系、その他のいずれかを選択）、異性との交際経験の有無について回答を求めた。また、研究1で選定された浮気に対する態度を表す22項目の各々に対し、回答者自身が同意見または近い意見を持つ場合には“あてはまる”に○、異なる意見を持つ場合には“あてはまらない”に○を付けるよう求めた。

調査方法 本調査は2014年6月30日～7月4日にかけて実施され、文教大学越谷キャンパスおよび東京都心のA大学のキャンパス内で、それぞれの大学に在学する学生に調査票を直接配布し、その場で回答を求めた。また、回答完了直後に調査票を回収した。

倫理的配慮 本調査は無記名で実施された。また、回答結果が統計的に処理され、個人の回答を特定することができる形で結果を公表することがない旨を、調査票に記載した。調査対象者に対し本調査の趣旨を説明した上で、回答への同意が得られた者のみを本研究の調査対象者とした。

結果

調査対象者の属性情報 調査対象となった大学生の人数について、学年と交際経験の有無に関するクロス集計を行い、大学間での度数分布の違いを χ^2 検定により比較した（表2）。その結果、調査対象者の学年の大学間での偏りが有意であった（ $\chi^2(4) = 49.80, p < .01$ ）。Haberman法

による残差分析の結果、文教大の学生には2・3年生が有意に多く含まれ、都心の大学の学生には1年生が有意に多く含まれていることが示された。一方で、調査対象者の交際経験の有無の大学間での偏りは有意ではなかった ($\chi^2(2) = 2.55, n.s.$)。

表2 大学別の調査対象者の内訳

		学年					交際経験			
		1年	2年	3年	4年	その他	あり	なし	未回答	
(越谷) 文教大学	男性(名)	9	20	6	3	0	28	10	0	
	女性(名)	8	22	5	7	0	34	8	0	
	合計	度数	17	42	11	10	0	62	18	0
	合計	%	10.49	25.93	6.79	6.17	0.00	38.27	11.11	0.00
	調整済み残差		-6.77**	4.74**	3.04**	1.41	-0.99	-1.08	1.29	-0.99
都心の大学	男性(名)	27	9	1	4	1	39	3	0	
	女性(名)	34	5	0	1	0	30	9	1	
	合計	度数	61	14	1	5	1	69	12	1
	合計	%	37.65	8.64	0.62	3.09	0.62	42.59	7.41	0.62
	調整済み残差		6.77**	-4.74**	-3.04**	-1.41	0.99	1.08	-1.29	0.99
全体	男性(名)	36	29	7	7	1	67	13	0	
	女性(名)	42	27	5	8	0	64	17	1	
	合計	度数	78.00	56.00	12.00	15.00	1.00	131.00	30.00	1.00
	合計	%	48.15	34.57	7.41	9.26	0.62	80.86	18.52	0.62

** $p < .01$

各意見項目への回答の大学間での比較 各意見項目に対する回答反応傾向の違いを大学間で比較するため、選択された回答に関するクロス集計を意見項目ごとに行い、 χ^2 検定により比較した(表3)。その結果、肯定的意見項目に対しては“あてはまらない”の選択率が両大学で高いものの、その傾向が文教大学の方が有意に強い意見項目が複数確認された。一方、多くの中立～やや否定的な意見項目に対しては、“あてはまる”の選択率が両大学で高く、その傾向が文教大学の方が有意に強い意見項目が複数確認された。さらに、一部の意見項目に対しては大学間で回答反応傾向が逆転していたが、その違いが有意であった意見項目では、いずれも文教大学の学生の方が浮気に対して否定的な態度であることを示すものであった。

表3 各意見項目に対する大学別の回答反応傾向

意見項目	尺度値	文教大学		都心の大学		χ^2 値
		あてはまる 度数 (%)	あてはまらない 度数 (%)	あてはまる 度数 (%)	あてはまらない 度数 (%)	
浮気をすることに魅力を感じる	6.500	3 (1.85)	77 (47.53)	11 (6.79)	71 (43.83)	4.79 *
今の恋人に飽きたから浮気してもよい	6.286	4 (2.47)	76 (46.91)	9 (5.56)	73 (45.06)	1.96
浮気をする事で、恋人と別れた時の保険をかけることができる	6.071	18 (11.11)	62 (38.27)	29 (17.90)	53 (32.72)	3.26 †
恋人が浮気をしたから自分もしてもよい	5.929	19 (11.73)	61 (37.65)	23 (14.20)	59 (36.42)	.39
浮気に憧れる	5.857	3 (1.85)	77 (47.53)	11 (6.79)	71 (43.83)	4.79 *
恋愛も浮気も本質は同じである	5.500	27 (16.67)	53 (32.72)	35 (21.60)	47 (29.01)	1.37
性的欲求を満たすためには、浮気は仕方がないと思う	5.357	8 (4.94)	72 (44.44)	30 (18.52)	52 (32.10)	15.94 **
浮気を実践しないけどしてみたいという願望がある	5.071	17 (10.49)	63 (38.89)	20 (12.35)	62 (38.27)	.23
浮気はだめだと分かっているが、その場の雰囲気ですぐ浮気をしてしまう	4.929	9 (5.56)	71 (43.83)	31 (19.14)	51 (31.48)	15.36 **
悪いことだけど、浮気をする気持ちも理解できる	4.643	38 (23.46)	42 (25.93)	55 (33.95)	27 (16.67)	6.35 *
浮気はだめだと分かっているが、もし言い寄られたら断らないだろう	4.429	12 (7.41)	68 (41.98)	34 (20.99)	48 (29.63)	13.95 **
浮気をする人は勇気がある	4.286	42 (25.93)	38 (23.46)	55 (33.95)	27 (16.67)	3.58 †
浮気に関して善し悪しが一概には言えない	3.929	44 (27.16)	36 (22.22)	52 (32.10)	30 (18.52)	1.19
浮気は金がかかると思う	3.786	55 (33.95)	25 (15.43)	40 (24.69)	42 (25.93)	6.66 **
浮気をする事は、別れる原因になると思う	3.000	74 (45.68)	6 (3.70)	73 (45.06)	9 (5.56)	.58
浮気をすると周りにも迷惑がかかると思う	2.571	73 (45.06)	7 (4.32)	63 (38.89)	19 (11.73)	6.25 *
浮気は淫らな行為である	2.357	48 (29.63)	32 (19.75)	52 (32.10)	30 (18.52)	.20
浮気は、本命だけでなく、浮気相手も悲しませしてしまうと思う	2.071	68 (41.98)	12 (7.41)	59 (36.42)	23 (14.20)	4.07 *
浮気はくだらないことだと思う	1.857	44 (27.16)	36 (22.22)	36 (22.22)	46 (28.40)	2.00
浮気をする人は人間的にだらしないと思う	1.643	59 (36.42)	21 (12.96)	61 (37.65)	21 (12.96)	.01
浮気をする人は、人間として最低である	1.429	41 (25.31)	39 (24.07)	31 (19.14)	51 (31.48)	2.97 †
何故浮気するのか理解できない	1.143	37 (22.84)	43 (26.54)	26 (16.05)	56 (34.57)	3.60 †

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

大学生の浮気に対する態度尺度に含まれる下位概念の検討 研究1で作成された大学生の浮気に対する態度を測定するための尺度に含まれる下位概念について検討するため、多重コレスポネンダ分析を行った。その結果、固有値の減少傾向と結果の解釈可能性の観点から2次元解を採用し、平面上に各意見項目が布置された(図1)。各意見項目の布置のまともは項目間の反応傾向の類似性を示しており、“憧れ”、“肯定・容認”、“消極的肯定”、“否定”の4つの下位概念で本尺度が構成されているものと解釈された。

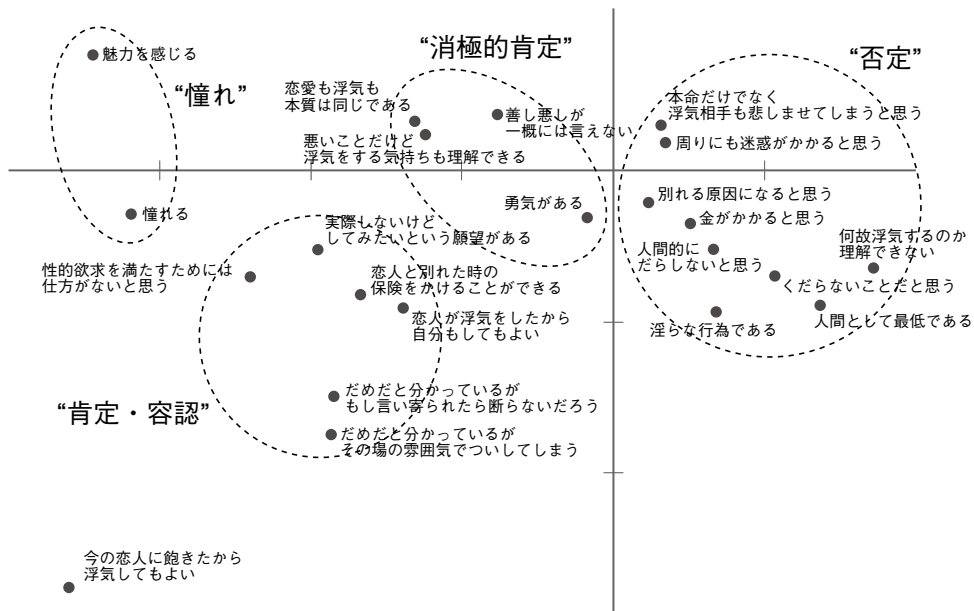


図 1 浮気に対する態度尺度の意見項目の布置

浮気に対する態度得点の比較 浮気に対する態度尺度に対し、各調査対象者が同意見と回答した意見項目の尺度値を合計し、これを同意見と答えた意見項目で除した値を、各調査対象者の浮気に対する総合態度得点とした。各大学で性別ごとに平均得点を算出した (表 4)。浮気に対する総合態度得点を大学間で比較するため、大学(2)×性別(2)の2要因分散分析を行った。その結果、大学と性別の交互作用に有意傾向が認められた ($F(1, 158) = 3.60, p < .10$)。Bonferroni法による各要因の単純主効果の検定を行った結果、男性において文教大学よりも都心の大学の学生の方が有意に態度得点が高かった ($F(1, 158) = 15.00, p < .01$)。また、都心の大学において女子学生よりも男子学生の方が有意に態度得点が高かった ($F(1, 158) = 9.90, p < .01$)。

さらに、上記と同様の方法で、浮気に対する態度尺度の下位概念ごとの平均態度得点を算出した (表 4)。浮気に対する“憧れ”の得点を大学間で比較するため、大学(2)×性別(2)の2要因分散分析を行った。その結果、両要因の交互作用は有意ではなかった ($F(1, 158) = .67, n.s.$)。一方、大学の主効果には有意傾向が認められ ($F(1, 158) = 3.61, p < .10$)、文教大学よりも都心の大学の学生の方が有意に得点が高い傾向が確認された。また、性別の主効果が有意であり ($F(1, 158) = 5.97, p < .05$)、女子学生よりも男子学生の方が有意に得点が高かった。

浮気に対する“肯定・容認”の得点を大学間で比較するため、大学(2)×性別(2)の2要因分散分析を行った。その結果、両要因の交互作用に有意傾向が認められた ($F(1, 158) = 2.94, p < .10$)。Bonferroni法による各要因の単純主効果の検定を行った結果、男性において文教大学よりも都心の大学の学生の方が有意に得点が高かった ($F(1, 158) = 9.28, p < .01$)。また、都心の大学において女子学生よりも男子学生の方が有意に得点が高かった ($F(1, 158) = 4.14, p < .05$)。

浮気に対する“消極的肯定”の得点を大学間で比較するため、大学(2)×性別(2)の2要因分散分析を行った。その結果、両要因の交互作用は有意ではなかった ($F(1, 158) = 2.57, n.s.$)。ま

た、性別の主効果も有意ではなかった ($F(1, 158) = .61, n.s.$)。一方、大学の主効果は有意であり ($F(1, 158) = 5.96, p < .05$)、文教大学よりも都心の大学の学生の方が有意に得点が高かった。

浮気に対する“否定”の得点を大学間で比較するため、大学(2)×性別(2)の2要因分散分析を行った。その結果、両要因の交互作用は有意ではなかった ($F(1, 158) = .64, n.s.$)。また、大学の主効果 ($F(1, 158) = 1.48, n.s.$) と性別の主効果も有意ではなかった ($F(1, 158) = .88, n.s.$)。

表 4 浮気に対する態度得点

	平均 尺度値	文教大学		都心の大学		交互作用	F 値	
		男性	女性	男性	女性		大学	性別
総合態度得点	4.029	3.12 (.77)	3.05 (.66)	3.73 (.70)	3.24 (.71)	3.60 [†]	-	-
憧れ	6.179	.64 (1.90)	.15 (1.00)	1.46 (2.63)	.48 (1.71)	.67	3.61 [†]	5.97*
肯定・容認	5.298	2.41 (2.72)	2.64 (2.82)	4.19 (2.08)	3.01 (2.78)	2.94 [†]	-	-
消極的肯定	4.589	3.55 (1.89)	4.04 (1.37)	4.38 (.74)	4.22 (1.01)	2.57	5.96*	.61
否定	2.206	2.40 (.23)	2.31 (.26)	2.29 (.57)	2.28 (.19)	.64	1.48	.88

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

考 察

各意見項目への回答の大学間での比較 キャンパス立地環境の違いが大学生の浮気に対する態度に与える影響について検討するため、文教大学越谷キャンパスの学生と東京都心の A 大学の学生を対象として、浮気に対する態度を測定した。浮気に対する態度尺度の各意見項目に対する調査対象者の回答反応傾向を大学間で比較した結果、東京都心の大学の学生の方が文教大学の学生と比べて浮気に対して肯定的態度を示す傾向が顕著であった。調査対象者の異性との交際経験に大学間で有意差が認められなかったことから、両大学の学生の浮気に対する態度の違いは、恋愛に関する経験の違いによって生じたのではなく、各々の大学の文化や風土、学生生活のスタイルの違いが一因となっているものと考えられる。

浮気に対する態度得点の比較 浮気に対する態度尺度に対する回答から算出した浮気に対する総合態度得点は、調査対象となった2つの大学において、いずれも調査に使用した態度尺度の平均尺度値を下回っていた。“浮気”という行為は、倫理的観点からすると好ましい行為とは言い難いが、両大学の学生の多くが、浮気に関して一定の倫理観を持っていることが示されたと考えられる。しかし、大学間および性別間で得点を比較した結果、男性では文教大学よりも東京都心の大学の学生の方が有意に高く、東京都心の大学では女子学生よりも男子学生の方が有意に高かった。大学と性別の2要因が同尺度の下位概念ごとの態度得点に与える影響について検討を行った結果からも、文教大学よりも東京都心の大学の学生の方が浮気に対して肯定的であり、東京都心の大学の男子学生においてその傾向が顕著であることが示された。

浮気に対する態度得点の大学間での違いは、各意見項目に対する回答反応傾向と同様の傾向であった。したがって、文教大学の学生が東京都心の大学の学生よりも浮気に関して否定的な態度であり、より保守的な価値観を持つことが示されたものと考えられる。両大学のキャンパス立地環境の違いによって生じた交友関係の多様性の差が、両大学の学生の浮気に対する態度の違いとして表れている可能性があると考えられる。本研究では調査対象者の交友関係についての調査を行っていないため断定することはできないが、大前 (2005) や曾・長澤 (1998) と同様に、文教

大学の学生は、交友関係や学業以外の活動内容が東京都心の大学の学生と比べ限定的であるものと推測される。都市部には多様性に富んだ文化や情報が溢れ、多様な価値観と接触する機会が郊外と比べて相対的に多くなるものと考えられる。そのような環境への適応を通じて、都市部のキャンパスに通学する学生は、様々な価値観に対する社会的寛容性を獲得しているものと推測される。本研究で調査対象となった東京都心の大学の学生は、文教大学の学生と同様に浮気に対してやや否定的態度を示してはいたが、有意に寛容的な態度であったと見なすことができる。

また、浮気に対する態度の違いは性別にも表れ、特に浮気に対する肯定的意見項目で構成される下位概念で、女性よりも男性の方が得点の高い傾向が顕著であった。牧野（2011）では、「浮気への憧れ」因子の得点が、女性よりも男性で有意に高いことが示されていた。同研究の浮気に対する態度項目の因子分析結果と、本研究の研究1で作成した浮気に対する態度尺度の下位概念は、内容的に必ずしも一致するものではないが、本研究の結果は、牧野（2011）の結果と一致する傾向を示していると考えられる。浮気に対する否定的態度の弱さは、恋愛関係における排他性の低さ（牧野、2011）と見なすことができ、本研究では、女性よりも男性でその傾向が強いことが示された。増田（1994）は、恋愛関係において排他的に行われる“儀礼的行為”には「恋愛性」が含意され、女性の方が、これを恋愛集団の存続可能性の予測要因として位置づけ、重要視していることを示している。本研究で確認された浮気に対する態度の性差は、恋愛関係における自身の儀礼的行為に関する排他性の重要度の性差が反映されたものであると解釈することができる。これは、恋愛関係において異性との間で行われる行為を他の異性との間で行う場合に、男性の方が“浮気”に該当する行為であると認識しづらいことと同義であり、船谷他（2006）の結果を支持するものであった。

本研究の限界 本研究では、調査対象となった2つの大学間の浮気に対する態度差が示され、大学のキャンパス立地環境の違いがこの差の一因であると考えられた。しかし、両大学の学生の生活スタイルや活動範囲、交友範囲などの学生生活を過ごすキャンパス立地環境の影響を受ける様々な違いが具体的に測定されていない。このため、学生の浮気に対する態度の違いを説明する変数を明確に特定することができていない。本研究では、調査対象となった2つの大学の学生の浮気に対する態度についての実態を示すことはできたが、その違いの原因を特定するためには、より詳細な調査が必要とされる。

また、本研究の調査では、調査対象者の所属学部の変理についての回答を求めたが、結果的に、全調査対象者が文系学部 に在籍していた。文系学部と理系学部では、キャンパスへの滞在時間や交友範囲などが大きく異なると考えられる。したがって、本研究の結果は、大学生一般に共通する浮気に対する態度の傾向を示すものではなく、あくまでも文系学部 に在籍する学生の傾向としてとらえる必要があると考えられる。

付 記

本研究は、文教大学人間科学部 2014 年度心理学基礎実験の授業の一環として行われた。

引用文献

- 船橋伸一 (2014). 都心部へのキャンパス移転が志願者数に及ぼす影響について — 大学は立地産業なのか — 大学入試研究ジャーナル, **24**, 21-27.
- 船谷明子・田中洋子・橋本和幸・高木秀明 (2006). 大学生における浮気観と浮気・被浮気経験との関連 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I, 教育科学, **8**, 99-117.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2014). 平成 24 年度学生生活調査結果
〈http://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/documents/data12_all.pdf〉 (2015 年 1 月 22 日)
- 北林吉弘 (1983). 越谷市の都市化の進展と問題点 — 南荻島出津地区の事例 — 生活科学研究 (文教大学生生活科学研究所紀要), **5**, 21-24.
- 牧野幸志 (2011). 青年期における恋愛と性行動に関する研究(2) — 浮気の判断基準と浮気に対する態度 — 経営情報研究 (摂南大学経営情報学部論集), **19**(1), 41-56.
- 増田匡裕 (1994). 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, **34**, 164-182.
- 大前敦巳 (2005). 学生生活を通じた文化習得プロセス — 1・2 年自生の質問紙追跡調査の結果から — 上越教育大学研究紀要, **25**, 285-298.
- 斎藤修平・岡本紋弥・佐藤和平・佐藤ひろみ・中林みどり・八藤後忠夫 (2012). 元荒川の生活誌 (第一報) — 文化景観論的アプローチ — 生活科学研究 (文教大学生生活科学研究所紀要), **34**, 49-58.
- 曾 光宗・長澤 泰 (1998). 大学の立地差異による生活活動の時・空間的特徴の比較: 学生の生活活動空間からみた大学キャンパス計画に関する研究、その 2 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎, 1998, 323-324.